

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

NO 202
2017.12.01

名古屋モザイク工業 DESIGN AWARD 2017 授賞式開催！



岐阜県多治見市の総合タイルメーカー・名古屋モザイク工業(株)は、タイルを使用した施工事例を募集し、コンテストを開催した(6月30日締め切り)。昨年に続き、第2回となる今回は、応募総数が328件(非住宅部門111件、住宅部門217件)。一次審査でそれぞれ47件、67件が選出され、審査員により金賞・銀賞・銅賞・入賞・特別賞の12作品が選ばれた。10月13日(金)には大阪ショールームにて授賞式が開催された。受賞作品を紹介するとともに、式の様子をレポートする。



アジアンビストロDai 東京ガーデンテラス店

株式会社PUZZLE(東京都)

テーマ：エスニックのエッセンスを詰め込んだカラーリング(店舗)



設計者コメント

40坪という決して大きくない店舗だが利用の仕方に合わせダイナミックでスタイリッシュに3つのシーン分けをした。全体を繋ぐお店のアイデンティティとして大きな天井造作を設けた。アジアンのモチーフとしてパイソン柄を店の象徴として使用し、それをネガティブになりすぎないカラーリングで整えた。ライティングの反射で艶感を演出する為に厚みに傾斜のあるタイルを使用し、特殊な塗装を施した。全体を繋ぐアイコンとして、またお店のアイコンとして印象強く残るデザインとした事でカジュアルさの中にラグジュアリーの要素を盛り込み立地に合った設えとした。

使用タイル：「エザーゴ」天井

審査員コメント

彦根氏：とても面白い使い方であり、照明との組み合わせが素晴らしいです。

塩田氏：カジュアルなアジア料理ときびきび動く元気な店員が印象的なこの店にふさわしく、カラフルで華やかなタイルが、空間全体に活気を与えている。天井のタイルだけでなく、店の内外全体にわたって、小さな素材をたくさん貼り合わせるという方法を繰り返すことで、賑やかさを生み出している(入り口まわりの腰壁やレンガタイルなど)。バーカウンター、テーブル席、ロングテーブル席という多様な席バリエーションを持つ店内に、天井の造作と赤系の壁面が、一体感を与えている。



夕日の家

有建築研究所（広島県）

テーマ：夕日の家…海に沈む夕日を望む週末住宅



設計者コメント

瀬戸内海の島の西海岸に面して建つこの週末住宅は、斜面から張り出すように設けたデッキテラスがメインスペースとなっている。デッキテラスに続く白い漆喰のボリュームはリビングや居室をフローリングとし、外観の黒いボリュームの玄関、バスルーム、キッチンダイニングをタイル貼りとして、二つの素材感をデザインした。住人はこの二つのボリュームと素材感を行き来することで、いつの間にか海と出会う。この雰囲気を実現するのに、最適なタイルだった。

使用タイル：「ノール」玄関、廊下、ダイニングキッチン、浴室

審査員コメント

彦根氏：静かで明確なデザインは、大きな面積で使ったタイルがメインの材料となっており、とても気持ちの良い空間です。

塩田氏：建築的な二つのボリュームを、インテリアでの素材感と色味に呼応させている、明快なデザインに好感を持った。バスルームでもリビングルームでも、床材がテラスにまで連続しており、屋内外の連続性が演出されている。この立地にふさわしいデザインだと感じた。特に、バスルームでは、建材のバリエーションをほぼタイル1種類に絞ることで、インテリアがあまり気にならず、人の意識が屋外の風景へと自然に誘導されるだろう。それについて、ランダムに模様が付いた石調タイルが、自然の風景と相性が良いように感じられる。

デザインアワード2017・応募要項

応募条件

2016年4月1日～2017年6月30日までに国内外でタイルを使用した建物（住宅・店舗・ビル・病院・公共施設など）や造形物など。名古屋モザイク工業の商品が使用されていること。

応募資格

応募作品の施主様または、設計者、デザイナーであること。

審査基準

タイルの新たな可能性が感じられ、オリジナリティーにあふれる作品。審査は審査委員の合議の上、総合的に審査します。



会場となった大阪ショールーム。
タイルのショールームとしては
国内最大級。

審査員

杉本貴志 氏（インテリアデザイナー）

彦根アンドレア 氏（建築家）

塩田健一 氏（月刊誌「商店建築」編集長）

早田辰比呂 氏（名古屋モザイク工業代表取締役社長）

応募期間

2017年2月1日（水）～ 6月30日（金）

賞金

金賞	50万円	住宅1件／非住宅1件
銀賞	30万円	住宅1件／非住宅1件
銅賞	20万円	住宅1件／非住宅1件
入賞	10万円	若干名



FIFTH SEASON

株式会社コクーンデザイン(大阪府)
テーマ:FIFTH SEASON(店舗)



設計者コメント

四季が移り行く中、君と過ごす時間が五番目の季節、とコンセプトをたて、随所に四季十一季を感じさせるデザインにした。バーカウンターにはダイスの5をイメージし、春→黄緑、夏→深緑、秋→紅葉、冬→枯葉、と緑の移り行くカラーを散りばめています。そこに男女の愛がプラスし五季となります。

使用タイル:「ロザリア」BAR

審査員コメント

彦根氏:タイルと店のデザインがとてもマッチしています。特に、タイルとスチールの組み合わせが美しく目を引きま。

塩田氏:決して工事予算は潤沢ではなかったと思うが、コストをかける場所を限定して、その部分で賑わいやインパクトを生み出していることを評価したい。その象徴がバーコーナーのモザイクタイルだ。バーカウンターの腰壁から床までモザイクタイルを連続させ、そこにタイルで大柄なグラフィックを描くことによって、織物やカーペットをデジタル化したようなリッチな表情を与えている。タイルのグラフィカルな使用方法として多くのデザイナーの参考になるのではないか。



岡山ビル

山本嘉寛建蓄設計事務所(大阪府)
テーマ:歴史のある素材。歴史となる建築。(オフィスビル)

設計者コメント

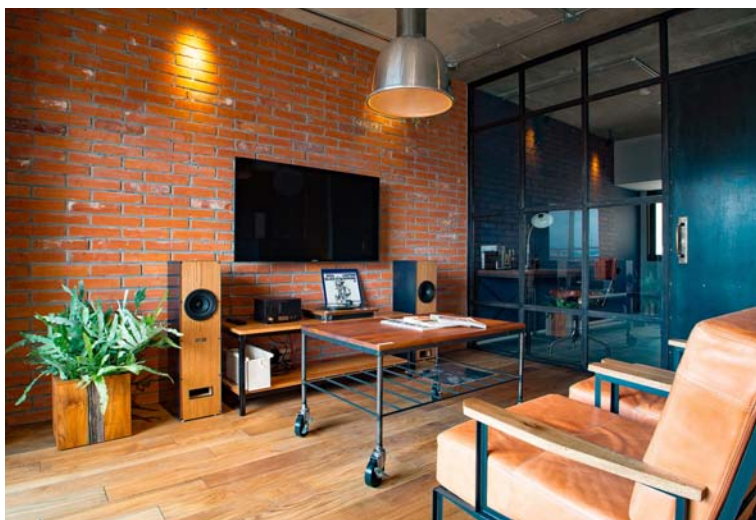
大阪市内。築45年の一見何処にでもある小さな貸オフィスビル。長い歳月を経て醸成された素材に価値を見出しつつ、現代的な意匠・設備・構造へと全体を更新することで何処にもない建築へと再生した。約100年前の上海の建造物から再生したという古レンガは、通常の3倍の目地材を使用して彫りの深い表情とし、通りからエントランスへ来訪者を導く巨大な壁面となって、建物に負けない存在感を発揮している。建築も素材も、いったん止まっていた時間が再び時を刻み始める。新たな時間の積み重ねによって、このデザインがやがて歴史の1頁となることを期待している。

使用タイル:「古窯磚」内装壁

審査員コメント

彦根氏:新しい時間の始まりを感じさせると同時に、過去の時間も共有し、大切に思い出しながら過ごせる空間です。

塩田氏:不均質な色味の古レンガを壁一面に丁寧に貼ることで、「古さ」「汚さ」というネガティブな雰囲気や、「味わい」「懐かしさ」というポジティブな雰囲気に転換しているように見える。そこに魅力を感じた。古いビルでは、剥き出しにされたモルタルの壁や床が魅力的である一方で、それは時として、ぶっきらぼうで、非人間的な冷たい印象を与える。しかし、それぞれに色の異なる小さな単位(レンガ)を大量に集積させることによって、そこにヒューマンなスケールや、飽きのこない複雑な表情が生まれ、人間味が立ち現れてくる。そう感じさせてくれる使用例であるように感じた。



〇様邸リノベーション

CODESTYLE (福岡県)

テーマ: インダストリアルデザイン

設計者コメント

「無骨さと無機質さにこだわる」家具を含めたインテリアまでトータルでコーディネート。壁一面のレンガと、アイアンのパーテーションを大胆に取り入れ、無骨さと無機質さにこだわったインダストリアルな雰囲気空間に仕上がりました。その他にはエントランスを中心に、CODESTYLEならではのサインペインティングを施し、普通とは違うリノベーションを施しました。

使用タイル:「古窯磚」リビング

審査員コメント

彦根氏: 材料の組み合わせが素晴らしく、一度は住んでみたいと思わせる空間です。

塩田氏: 床・壁・天井、建具、家具、照明器具など、すべての要素に渡って世界観を統一されている空間に身を置いた時、多くの人は高揚感を感じるだろう。そうした空間がこの住宅で実現されているように見える。施主はとても気持ちよく、世界観に浸って生活できるだろうと感じる。強いて言えば、応募シートのテキストに、この施主がどんな要望を持ち、どんな暮らし方を望んでいたか、一言説明が欲しかった。というのは、これだけ強い世界観で統一すると、数年後に飽きてしまう可能性もあるため、施主によほどの覚悟があっただろうことが推察されるからである。



設計者コメント

敷地は、幅の広い道路に面してはいるが北向きである。裏側は、現在駐車場であまり十分な採光が得られていない。しかし、いつ何なる建物で南面を覆われるとも限らない。計画は、住宅の設計において限りなく初步的な発想から始まった。施主は、伝統を慮り檜と畳を内装に、外装は呉の街並みに古くから伝わるレンガ張りを希望された。建物の前と後ろにある吹抜け・インナーバルコニーは、大通りの喧騒と商店街が突き当たる商業地域として、人の住処に対するバッファゾーンという役割を兼ね備えている。

使用タイル:「古窯磚」外壁、「バイオアーチストン」浴室、「イリーデ」エントランスホール、浴室



審査員コメント

彦根氏: 色のバランスが良く、コンクリートと木、タイルが非常にマッチしています。

塩田氏: 応募写真の外観が夕景のみなので、外装タイルの色味がハッキリわからず残念ではあるが、おそらく静けさやプライバシーを確保するために、あえて街に対して閉じた外観となっており、もし例えばこの外観をコンクリート打ち放しなどで仕上げると、だいぶ冷たい印象になるであろうが、そこをレンガ張りで緩和している。その結果、むしろ温かみのあるモニュメントのような佇まいを獲得しているように見える。また、室内は、静謐さと、趣味の空間としての楽しさが同居しているようで、興味を持った。

呉中通りの家

一級建築士事務所9月の風 (広島県)

テーマ: 呉の街並みに溶け込むシンプルなデザイン

「時代の流れにタイルの可能性を見る」 ～授賞式から

授賞式では、はじめに早田辰比呂社長から挨拶が述べられた。

「デザインアワードは昨年から始めまして第2回となります。今日お越しの皆様方の作品は、タイルの新たな使い方の指針となるかと思います。

タイルとは何ですか？という方が非常にたくさんいらっしゃいます。日本のタイルの消費量は一年間、4千万㎡を切ります。バブルの時代の1990年くらいは1億㎡が消費されていました。現在は国産タイルの消費量は2千万㎡以下で、輸入タイルの消費量は2千万㎡。合計で4千万㎡です。お隣の中国では、60億㎡を超える生産量です。ざっと150倍です。

日本のタイルの消費量が減っていく中で、タイルの新しい使い方を皆さんに提案いただくことでタイルの消費量がどんどん伸びることを祈念しております」

続いて相澤昭郎営業推進室室長より、デザインアワードの概要と選考での感想が述べられた。

「非住宅部門の金賞の作品では、天井にヘキサゴンを使っています。この作品を見たときは息をのみました。タイル業者としなくても屋根や天井に使うのは憧れです。日本のタイルを使っていただったので、世界に発信できる新しい『天井装飾』というジャンルをつくっていただいたのではないかと思います」

表彰では、作品の画像とともに、設計者と審査員のコメントを紹介。受賞者からは受賞の喜びや、施主とのエピソードなどが語られた。

最後に、審査員の『商店建築』塩田健一編集長より、審査の基準とデザインアワードへの期待が述べられた。

「審査の基準は、一言でいうと『ポジティブにタイルを



使っているか』です。それは3つに分かれます。一つ目は「タイルの資質を引き出しているか」。これは岡山ビル（非住宅・銅賞）がそうです。2つ目は「フェイクの素材として使えているか」。お風呂に石調タイルを使っている作品（非住宅・金賞）がそうです。3つ目は「グラフィックな要素」。イタリアの大聖堂に使われているように、タイルは自由度の高い、画材のような要素をもちます。それを存分に引き出しているか。これは非住宅部門の金賞、銀賞の作品です。

皆さんの作品を見せていただき、タイルという素材は今の時代の雰囲気には合っていると感じています。今は「整理されすぎていないこと」がキーワードです。ムラがある、不均質、人間味がある、いろんな要素が混在しているといった言葉で言い換えられます。モノの売り方でもそうです。どこからが共用部か、お店なのかわからない、複数の空間が渾然一体となっているお店が人気です。

このキーワードを建材のレベルで浸透させるとしたら、タイルがその可能性をもっているのではないか。タイルは焼き物、自然素材であり、本物である。ムラや凹凸があり、一つひとつ異なっている。どの作品も小さいタイルをものすごくたくさん貼り付けて形をつくっています。そうした要素によって、今流行っている商業施設の業態を表現できると感じます。

たとえば住宅でも、この価値観に深いところで結び付いた事例がもっと多くあるでしょう。このデザインアワードを継続していただけたら、楽しみだなと思っています」



早田社長



相澤営業推進室室長



塩田健一編集長



授賞式出席者で記念撮影。



製造工程を写した写真パネルや各社タイルのサンプル、顔料、釉薬の製造に使われる道具などが展示された。



レポート 多治見市モザイクタイルミュージアム特別展「工場賛歌〜釉薬編」

タイルを美しく覆い、強くする

～関連企画「釉薬工場の社長に「釉薬」を聞く」より

多治見市モザイクタイルミュージアムでは、8月26日(土)～11月26日(日)まで特別展「工場賛歌〜釉薬編」を開催。会期中は多彩な関連企画が行われた。10月14日に行なわれた講演の様子を中心に紹介する。

特別展「工場賛歌〜釉薬編」は、昨年行なわれた「工場賛歌〜原料編」に続く第2弾。タイルの製造技術に焦点をあてた生産地ならではの内容で、関連企画も充実。今回もカメラで撮影しながら見学する「ファインダー越しの工場見学」を開催。ワークショップは、「世界に一つの釉薬を作る」「タイルで学ぶ カラーマジック簡単テクニック」「ゆうやく教室 お料理みたいに色をつくろう?!」など、ユニークな内容が並んだ。

工業製品としての釉薬とは

10月14日(土)には「釉薬工場の社長に「釉薬」を聞く」を開催。芸術系の学校に通う若い女性や、陶芸を趣味とする男性など、多くの人が集まった。お話しされたのは、タイルや瓦の釉薬メーカー・株式会社カクジンの水野清司社長。この道45年で手がけた釉薬は

「星の数ほど」。会社案内には名古屋市のJRセントラルタワーズなどの写真が並ぶ。「永遠の目標は、自然の素晴らしい色を作ることです」と語る。

まず釉薬とは何か。「ガラス状の被膜であり、強酸・強アルカリ以外にはほとんど溶けない」。施釉の目的は「素地の表面を覆う被膜の役割をし、美観を与え強度を増すこと」で、工業製品の釉薬はまず過酷な環境に耐えることが求められる。その環境とは食器なら電子レンジや食器洗浄機、外装タイルは季節ごとに変化する環境、衛生陶器(便器)は洗浄薬品。実際に強力な洗剤を使って試験をするという。「いろんな洗剤や機械が出てくるかもしれませんが、これに耐えるのが釉薬の必須条件です」と力強く話す。

話は縄文時代まで遡り、安土桃山～江戸時代～第一次世界大戦、戦後…それぞれの時代で技術が発達し、光沢や透明感のある色が実現されたことを解説。現代の技術は、歴史の積み重ねによって作り上げられたものであることを実感した。

蓄積と経験がものを言う

一つの釉薬を作るのには、15種類もの調合をする場合もあるという。「(発注された)色を見ただけで、ほぼ9割方の調合が頭に浮かびます。これがプロです」と水野社長。「星の数ほど」の釉薬を作ってきた蓄積、自信が伝わってくる。後半は展示会場に移って解説が行なわれた。タイルはもとより、食器までも少し違って見えるようになる講演、特別展となった。



基礎釉の主な原料。長石、シリカ、蛙目粘土が基本で、石灰石を加えることで釉薬となる。ここに色素として顔料を加えるが、その量は5%程度。



色とりどりの顔料。これまで色を出すために使われてきた金属に代わる顔料の登場で工業製品として安定した色を出せるようになった。



サンプルを手にする
水野清司社長。

れんがの空間をタイルの船がゆく 「杉戸洋 とんぼ と のりしろ」 (東京都美術館)

7月25日(火)～10月9日(月・祝)、東京都美術館(台東区上野公園)にて、現代美術作家・杉戸洋さんの個展が開催された。会場に現れたのは、多様なタイルで作られた船のような作品である。



「module」は、幅約15m×高さ約4mの大きさ。3m×3mの建築のグリッドと黄金比によって設計されたこの美術館に合わせて制作。作品名のとおり、ほかにも様々な尺度が意識されており、手のある高さにはピアノの鍵盤のような白い細長いタイルが並ぶ。

照明を落とした広々とした展示空間で、光が当てられ存在感を放つのがタイルを使った作品「module」。様々な色と形のタイルを地層のように、幾重にも重ねて制作。船のようにどっしりと佇む姿は、神々しさをも感じさせる。

展示の会場となった東京都美術館は、緑豊かな上野公園の一画に建つ。前川國男による設計で1975年に竣工。2010～2012年に躯体を残しつつ、全面改修がなされた。タイルの外観は一部作り直されたが、落ち着いた佇まいは今も変わることがない。ギャラリー空間は、タイルの床やごつごつとしたコンクリートの

壁など、独特の質感をもつ。

作家である杉戸さんは、この空間から着想を得て、タイルを使った制作を思いついたという。

「あの展示空間では絵の具で塗った色は弾かれてしまう気がしたんです。火が通ったものじゃないと何か落ち着かない。(中略)絵の具であれば簡単にできる理想の色を釉薬で表現することはとても難しくなりそうですが、普段の絵の制作と違うアプローチなので、初めての挑戦を楽しんでいます」(展示会特設サイトより)

タイルは愛知県常滑市にある水野製陶園で制作。美術館のタイルも常滑で制作されたものという。

ギャラリーに入っただけ、遠くから景色のように眺めた後、近づいて一枚一枚のタイルを見る。美術館のタイルのようなれんが色、水彩絵の具のような淡い色、土っぽさを活かした色、鮮やかな紫色。ポップでにぎやか、でも調和している。家をモチーフとした絵画作品を鑑賞し、展示室に置かれた椅子に座り、空間に浸っていると、様々な糸で織られたタペストリーのようにも見えてくる。「展示室をリビングルームに見立てた」という杉戸さんの言葉が思い起こされた。



東京都美術館の打ち込みタイル工法

美術館の外壁は、前川國男が考案した「打ち込みタイル工法」が用いられている。タイルを表面にただ貼り付けるのではなく、コンクリートを流し込む前に型枠の内側にタイルを設置し、そのまま固める。タイルがコンクリートと一体化し、剥がれにくい。



小さな穴は、タイルを型枠に固定させる釘を打つためのもの。

